

令和 元年 5 月 20 日現在

機関番号：14303

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16801

研究課題名(和文) ジュディット・ゴーチエの日本関連作品研究 源泉調査から時代背景との関連性考察まで

研究課題名(英文) Study of the literary works on Japan of Judith Gautier : from Research in their sources to Examination of their relevance to historical background

研究代表者

吉川 順子 (Yoshikawa, Junko)

京都工芸繊維大学・基盤科学系・准教授

研究者番号：90732032

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)： 欧米の大衆に日本文化を紹介した先駆であるフランスの作家ジュディット・ゴーチエの日本関連著作の全体像を描き出し、扱われた主題や作品制作の経緯を明らかにしたほか、その意義を日欧文化交流史に位置付けた。さらに3つの具体的な日本文化(「祭り」「和歌」「国生み」)について、本作家の著作を含め日欧交流黎明期から20世紀に至るまでの日本関連書籍における解釈の変遷を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日欧文化交流で重要な役割を果たしながら、その活動について十分に研究されていなかったジュディット・ゴーチエの日本関連著作の諸側面を調査することで、文学におけるジャポニズムの一端を明らかにしたほか、それをフランス本国における作家の没後百年の記念書籍内で公表することで、かつての豊かな日仏文化交流をフランスの読者に提示することができた。またその著作が、忘れ去られた日本文化を記録していたり、異文化受容が新たな創造を生むメカニズムを示していたり、外国における日本研究の広がりを知る入口となり得るなど、現代の日本において持つ意義も明らかにした。

研究成果の概要(英文)： This study clarified the overall picture for the literary works about Japan of Judith Gautier, french writer and pioneer who introduced the Japanese culture to Western public. I revealed the subjects of her works, the details of her creation, and also examined its meaning in the history of cultural exchange between Japan and Western countries. In addition, I illustrated the transition of interpretation of three concrete Japanese cultures (festival, classical Japanese poetry, Japan's creation myth) in the works on Japan written from the early days of cultural exchange between Japan and Western countries to the twentieth century, including Judith Gautier's works.

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：ジャポニズム 日仏文化交流史 ジュディット・ゴーチエ 19世紀フランス文学 比較文学

## 1. 研究開始当初の背景

ジャポニスムは、19世紀後半から20世紀初頭の欧米で、開国後の日本より渡来した文物の技法や世界観に影響を受けて新たな作品を生み出した芸術活動である。その研究は1980年頃から盛んになり、Siegfried Wichmann『ジャポニスム、1858年以降の西洋美術への日本の影響』(独1980)や馬淵明子『ジャポニスム 幻想の日本』(1997)等、印象派への浮世絵の影響の研究から、ジャポニスムを支えた日本品の伝播状況やサブカルチャーへの日本の影響まで調査されてきた。

そのうち文学におけるジャポニスムについては、William Leonard Schwartz『近代フランス文学における極東の想像的解釈』(仏1927)で概要が示されたが、研究が進んだのは20世紀に流行した俳句の受容、滞日経験のあるピエール・ロチやラファディオ・ハーンの著作が中心であった。小山ブリジット監修の復刻資料『フランス小説に描かれた日本』(2010-14)等で当時の日本関連作品に広く光が当てられたが、本研究で扱ったジュディット・ゴーチエを含め、実態は知り尽くされていなかった。

ジュディット・ゴーチエ(1845-1917)は極東に取材した小説や戯曲の創作、詩の翻訳等、ジャポニスムで重要な役割を果たした人物であるが、研究は緒に就いたばかりである。活動全般に関する研究書はJoanna Richardson『ジュディット・ゴーチエ』(英1986)を始め6本あり、Yvan Danielが『全集』(仏2011-)を刊行中である。極東関連作品を扱った論文にはMuriel Détrie「ジュディット・ゴーチエ『白玉詩書』、先駆書」(仏1989)、青木博子「『微笑みを売る女商人』とジャポニスム」(2004)があるが、作品執筆の経緯の解明と、時代背景に照らした作品の意義の考察が課題として残っていた。

これまでにYvan Danielが「ジュディット・ゴーチエとピエール・ロチの『天の娘』で舞台化された中国の事件」(仏2012)等で、書簡や参考文献の調査に基づき、中国関連作品の生成過程に迫る研究を発表しており、私はそれと同様の実証的な方法を用いて日本関連作品の研究を進めてきた。日本関連作品に関する注目すべき先行研究として、日本の神話や歌舞伎を元にした小説の記述を原文とを比較して作家の志向を探った、金沢公子「ジュディット・ゴーチエの『ジン・グウ皇后』 神功皇后の新羅征討物語のフランスにおける変容」(1990)があるが、作品の生成過程を多方面から跡づけ、本作家において異文化受容がいかなる意味を持っていたかという問いにつなげていくような研究がさらに必要であると考えたからである。

特に吉川順子『詩のジャポニスム ジュディット・ゴーチエの自然と人間』(2012)では、極東詩(漢詩・和歌)の翻訳を取り上げた。これは、作家が早くから関心を持ったもので、創作性もあり、極東文化に対する見解がより色濃く反映されていると推測したことによる。中国詩翻訳集『白玉詩書』(1867)と和歌翻訳集『蜻蛉集』(1885)の生成過程を解明(翻訳方法を原詩やプレオリジナルと比較する等)し、浮び上がった特徴を同時期に著した評論と突き合わせた結果、訳詩に表わされた極東の自然観への賛美は、作家が当時のヨーロッパ文化(バルビゾン派絵画やワーグナーの楽劇)を通して深めた“自然と人間”に関する考察の反映であったことを明らかにすることができた。

これにより、美術におけるジャポニスムの研究で既に指摘されていた、日本の自然観への関心とヨーロッパの人間中心主義の転回との連関をテキストで裏付けることができたほか、文学のジャポニスムを異国趣味や、賛美と優越のアマルガムといった視点でとらえてきた既存の発想を転換する必要性を感じるに至った。そこで、研究対象をさらに小説と戯曲に広げ、平成26-27年度科学研究費(研究活動スタート支援)による研究「ジュディット・ゴーチエの日本関連作品研究 全体像と小説『篡奪者』の生成過程の解明」で、まず完全には把握されていなかった本作家の日本関連作品を収集して全体像を描き出し、そのうち最初の小説『篡奪者』の生成過程(下敷きにされた資料等)を明らかにした。

## 2. 研究の目的

平成28-30年度科学研究費による本研究「ジュディット・ゴーチエの日本関連作品研究 源泉調査から時代背景との関連性考察まで」は、上記の背景を踏まえ、研究対象をジュディット・ゴーチエのすべての日本関連作品に広げて行ったものである。

これまでの調査を通して、以下の2つの事実を重要なものと認識していた。宣教師渡来の頃から日本関係の専門書は多くあったが、ジャポニスム期の文学作品を通して日本の歴史・伝統・文化が想像以上に詳しく一般読者に伝えられていた。ジュディット・ゴーチエの日本関連作品は、文献を下敷きにしながらも、同時代の日欧関係の影響を受けたり情報の取捨選択が行われたりして、独自の視点を織り込んだ創作になっていた。

このことから、先の平成26-27年度科学研究費による研究の成果(日本関連作品の全体像の構築と第一作目小説の分析)を引き継いで、本作家の著作における日本文化受容の手法とその背景に関する研究を完成させることに、次のような意義があると考えに至った。

(1) 異文化受容のメカニズムを考察するために

ジュディット・ゴーチエの著作は、日本の神話や伝統文化、歴史的イベント、古典文学等、日本人の精神を物語る情報をヨーロッパに伝えた。また、他の滞日経験のある作家の作品は憧れや幻滅など主観性が強いが、本作家は文献から得た情報にフィクションを加えて創作した。評論活動を通じて同時代のヨーロッパ文化にも精通していた。こうした特質から、その創作の実態を明らかにすることで、ジャポニスム研究全般にも関わる新知見をもたらすことができるのみならず、日本文化受容と当時のフランスの時代背景・文化的背景との関係、すなわち異文化受容のメカニズムを提示できる。

(2) 日本文化や日仏文化交流を振り返るために

日本においてジャポニスムの実態は未だ十分に周知されているとは言えず、それを学ぶことは自国文化を省みる契機となることがこれまでの研究を土台にして行った講義等を通して感じてきた。特にジュディット・ゴーチエが扱った日本人のアイデンティティに密接に結びつく主題は一層人々の関心を喚起し、自国文化の再認識を広く促すことができる。加えて、当分野はフランス文学研究のなかでも日本人が貢献すべき部分である。本研究を通して 150年に及ぶ日仏文化交流の豊かな歴史を伝えるだけでなく、本研究を行うことでもそれを継承する。

これらを目的とし、以下に記すように本研究を進めた。

3. 研究の方法

ジュディット・ゴーチエは1863年から1917年までの文学活動で、万博が開催される度に日本関連記事を書き、『東京』(1892)や『日本』(1912)に集成されるエッセーも多数執筆した。和歌翻訳集『蜻蛉集』に結実するような、西園寺公望や画家の山本芳翠を始め日本人との交流もあった。それに加えて注目すべきは、日本を舞台にした長短篇小説と戯曲(全9作品)を継続的に発表したことである。畠中敏郎「Judith Gautierの日本」(1968)に4つの代表作の概要が記されているが、以下の年表の通り5~7年に1作品のペースで創作を行った。

1875 長篇小説『篡奪者』 (後に『太陽の巫女』と改題)	1893 短篇小説「小町」
1882 短篇小説「花咲く葦の宿」	1898 短篇小説「神功皇后」
1888 戯曲『微笑みを売る女』	1900 長篇小説『愛の姫君たち』
1893 短篇小説「姫君十六の年」	1912 短篇小説「ヤマタの結婚」
	1914 短篇小説「天の機織り娘」

これらには私がこれまでに行った調査から次のような特徴があることがわかっている。日本の神話・信仰・史実・風土・社会・歳時記・文学・芸術などあらゆる側面を扱っている。『お菊さん』(1887)や『蝶々夫人』(1898)が西洋人男性が魅せられた幻想の日本を描いたのに対し、本作家は日本人のみを登場人物とし、文化や精神性の理解に重きを置いている。渡来品のイメージや個人的経験ではなく文献に依拠している。18世紀から同時期にかけて多数出版された日本関連書籍に基づいて執筆したことがいくつかの例から判明した。描写の微細さ(建物・武具・衣装・景観等)から、美術品や挿絵類を参照したとも推測できる。文献に基づくため、虚構や改変を加えた部分、意図的な情報の選択・削除を判別しやすい。

このことを踏まえ、次の項目を明らかにすることとした。

- A. 作品に織り込まれた日本に関する情報・・・何が伝えられたか?
- B. その情報の源泉となった資料・・・何をもとにしたのか?
- C. その情報を作品化した表現方法・・・いかに作品化したか?
- D. その作品化と当時の時代背景との関連性・・・その背景には何があったか?

4. 研究成果

本研究で得られた成果は、次の二つの方法で公表した。

すなわち、(1) 2017年は本作家の没後百年の記念年に当たり、フランス本国でラ・ロシェル大学のYvan Daniel教授を中心にシンポジウムの開催及び書籍(2019年3-4月に刊行予定であるが、現在やや遅れている)の出版が行われた。体調不良によりシンポジウムへの参加は見送ったが、書籍にフランス語論文「日本におけるジュディット・ゴーチエの死と再生」«L'œuvre de Judith Gautier au Japon : mort et renaissance»(編集中)を寄稿し、本作家の日本関連作品の研究結果を現代の日本にいかにして還元し得るかを論じると共に、すべての日本関連作品の主題(上記A)や執筆経緯(上記B・C)を年代順に解説した。個々の生成過程の詳細は十分には論じきれていないが、本作家による様々な日本関連作品がいかにして制作されたかを示すこと

で前述の目的(1)のうちジャポニズム研究全般にも関わる新知見をもたらし、このフランス本国における貴重な機会において目的(2)のうち日仏文化交流の豊かな歴史を伝えるだけでなく、本研究を行うことでもそれを継承することができた。

さらに、(2)ジュディット・ゴーチエの日本関連作品に現れる様々な主題のうち、特に「祭り」「和歌」「国生み」という3つに着目し、その情報の源泉となった資料(上記B)と作品のテキストの特徴(上記C)を調査・分析した上で、日欧交流黎明期以来の欧米諸国におけるこの3つの主題の解釈の変遷や同時代の解釈の特徴の中に位置付けた(上記D)論文を3本執筆した(主に後述の〔雑誌論文〕～)。それらにおいては、前述の目的(1)のうち日本文化受容と当時のフランスの時代背景・文化的背景との関係、すなわち異文化受容のメカニズムを提示したほか、文学のみならず哲学、言語学、美術史、社会学、文化人類学等、人文科学の様々な領域の研究者が参加する社会芸術学会の紀要『社藝堂』で発表することで、目的(2)のうち自国文化の再認識を広く促すことを目指した。

以下はそれらの概要である。

### (1)「日本におけるジュディット・ゴーチエの死と再生」(図書〔共著〕編集集中)

« L'œuvre de Judith Gautier au Japon : mort et renaissance »

ジュディット・ゴーチエは欧米諸国で日本物の文学作品を書いた先駆者であるが、現代の日本においてもその著作は新たな意味を持つ。具体的には次の三つの可能性がある。

第一に、現代の日本人にとって「未知の日本への導き手」となる点である。ジュディット・ゴーチエと日本の出会いは1862年のロンドン万博で侍を見たことに遡り、1867年に『モントゥール・ユニヴェルセル』紙に日本の精神や習慣、美術品を紹介する記事「万博報告、中国・日本・タイ」を寄稿して以後、1900年頃まで数々の日本関連著作を生み出した。そこには現代の日本人が知らない事柄も書かれている。例えば、1892年の『ル・ゴロワ』紙の記事「日本の犯罪」(1898年の『ク・ン・アトヌ』に「日本の犯罪」として、1912年の『日本(不思議な物語)』に「法律」として再録)は、横浜から送られた裁判記録を元に書かれた『ラ・ジュスティス』紙の記事を孫引きしたもので、男が母親の病気治療のため妻の生肝を取り出した事件を伝えている。1892年のエッセー『東京』(1912年に『日本(不思議な物語)』として再編)の「昔の衣服」では、日本の古い衣装や髪型を紹介する上で「生き人形」を取り上げている。これは幕末に始まり好評を博した興行であるが、昭和期にマネキン人形の登場で衰退し、現代では忘れ去られている。さらに日本の古い曲も書き留めた。1889年の『一八八九年の万博における奇妙な音楽』では「春雨、日本の古い歌」「米の神の祭り、日本の行進」の譜面と「日本で有名な田舎の音楽」の譜面及び歌詞の翻訳、1900年の『一九〇〇年の万博における奇妙な音楽』の「日本の音楽」では川上音次郎と貞奴による戯曲「芸者と侍」の翻訳、戯曲「袈裟」の要約、「鐘の奉献(能)」の譜面と歌詞の翻訳、「手毬」「花笠」「かつこう」「越後獅子」の譜面を記録している。このように本作家の日本関連作品は埋もれてしまった日本文化の宝庫となっている。

第二に、異文化受容が新たな創造を生むメカニズムを観察できる点である。特にジャンルを越えたテキストの再利用が特徴的である。『一八八九年の万博における奇妙な音楽』に収録された歌「日本で有名な田舎の音楽」は1875年の小説『篡奪者』に譜面付きで挿入された日本の伝統曲「高い山から」である。1882年の短篇集『イゾリーヌ、ヘビ花』に収録された「花咲く葦の宿」(1912年に「ヤマタの結婚」として『日本』に再録)に出てくる歌は「舌切り雀」を散文詩的に訳したものとわかる。また1883年に『ル・ラペル』紙に寄せた「日本美術回顧展」の一部は『篡奪者』の小野小町に関する一節である。1900年に『ラ・ルヴェ・ブランシュ』誌に発表した散文詩「花鳥は羽を整える」「花鳥は物語を語る」も、同年の長篇小説『愛の姫君たち』(1894年の小説「吉原の生きた花々」がプレオリジナル)からの抜粋である。こうした作品の紡ぎ方の中でも和歌を用いた作品生成はより高度である。本作家は1885年に和歌翻訳集『蜻蛉集』を出したが、10年前の『篡奪者』の歌会場面で翻訳された4つの歌のうち1つが転用されている。この加藤千蔭の歌は長年同定されず、美術品に書き捨てられた歌が小説に織り込まれたと推測される。1888年の戯曲『微笑み売る女』には表現レベルで『蜻蛉集』の焼き回しが見られる。1893年の『東洋の花』に収録された「小町」は先行研究が豊富にあった小町の逸話のアレンジであり、「姫君十六の年」は和歌の小説化と思われる。1894年に『ル・ジュルナル』紙に連載した小説「吉原の生きた花々」にも和歌の翻訳が挿入されている。このようにあらゆる情報が形を変えて作品化されており、その手法や意図はさらに分析が必要である。

第三に、外国における日本研究の広がりを知る入口となる点である。例えば『篡奪者』は大坂の陣を舞台とするが、生成過程の調査からエメ・アンペール『絵で見る日本』(1871)が参照されたとわかる。主人公の長門守のみ架空であるが、それは当時長州藩が英仏蘭米と二度の下関戦争を起こしたことで数々の日本関連書籍で言及されていたことが背景にある。別の例を挙げると、本作家は1879年の短篇集『奇妙な人々』で「養蚕秘録」と題し、上垣守国の『養蚕秘録』(1803)を紹介した。主題として唐突であるが、背景をたどると、養蚕が日本の技術輸出第一号であり、同書がすでに1848年ホフマンによって翻訳され、1868年には『養蚕新説』も蚕病に悩むフランス農業商業省の要請で翻訳されていたことを知るに至る。このように交流開始以来、欧米諸国の人々は日本のあらゆる側面を観察し記録してきた。もちろん欧米列強の植民地主義的な背景があったことに留意しなければならないが、様々なバックグラウンドを持つ訪

日者が綴った記録はむしろ柔軟で、各々の専門や関心が反映されている貴重な資料である。  
以上のように本作家の作品は現代の日本人にも資する側面を数々に有している。

(2)

「ジャポニズムを通して見る日本の伝統文化 祭り」(〔雑誌論文〕 )

ジュディット・ゴーチエの小説『篡奪者』(1875)には日本の祭りを描いた印象的な一章がある。大坂の陣を題材としたこの長篇小説は、史実と相容れない部分もあるが、エメ・アンペールの『絵で見る日本』(1871)を参照しながら制作したもので、祭りの場面(「海の神の祭り」)もそこから得た情報を元に描かれている。テクストを分析すると、アンペールの著書で紹介された祭りのうち、日枝神社の山王祭の行列や荏原神社の牛頭天王祭で行われる海中渡御の説明及び挿絵を参照したことがわかる。複数の祭りのとりわけ豪華な部分を継ぎ接ぎして執筆された。それは、古今東西の文学でよく見られるように、喧噪、興奮、混沌を表す祭りのモチーフを負の出来事(ここでは秀頼に対する家康の謀反の場面)と隣り合う構図にすることで、ドラマを生み出すためであった。

本論文では、日本の伝統文化である祭りが欧米諸国でどのように知られてきたのかも、宣教師渡来の頃からジャポニズムの時代に至るまでの文献をたどりながら明らかにした。日本の祭りはまず、欧米諸国において、神への奉納であると認識されながらも、華やかな行列や物珍しい余興のほうに多くの関心が寄せられた。盛大な祭りを描いたゴーチエの『篡奪者』もこの延長線上にある。しかし、そうした祭りは時に大衆化・商業化し、批判の対象となる。また、ジャポニズムの時代には、祭りに集う女性たちの艶やかさに興味が偏ったりもした。しかし、やがて交流の深化と共に、日本の祭りにおける豊かな時の巡りや、その根底にある自然に寄り添って生きようとする日本古来の心が理解されるようになったという変遷が見られる。

「ジャポニズムを通して見る日本の伝統文化 和歌」(〔雑誌論文〕 )

本論文では、日本の伝統文化である和歌が欧米諸国でどのように知られてきたのかを、宣教師渡来の頃からジャポニズムを経て20世紀初頭に至るまでの文献をたどりながら考察した。和歌はまず、ロドリゲスによって紹介されて以後しばらくは訪日者が偶然見聞きしたものを訳したり、それが孫引きされたりして伝えられた。翻訳集が作られたのは19世紀半ばになってからで、身分の貴賤にかかわらず日本の老若男女が詩歌に親しむ点に関心が集まったが、その独特な技法や歌意を訳すのは難しく、訳文の形式や解説のつけ方で試行錯誤が繰り返された。しかし、多彩な自然のテーマが認識されると共に和歌はジャポニズムに沸く人々を魅了し、鑑賞することに意識が向けられるようになり、やがて四季の移ろいという和歌の神髄の発見へと至った。

この経緯のなかでジュディット・ゴーチエの和歌翻訳集『蜻蛉集』(1885)は作家による創作的な翻訳でありながら重要な役割を果たした。特に西園寺公望による下訳を元に57577音節の5行詩で脚韻を踏ませた韻文訳を完成させ、画家の山本芳翠が下絵を描いた多色刷りの紙面に1首ずつ歌を配置して鑑賞向けに制作されたことのほか、和歌と自然の関係を印象的に表現した点が注目される。自然の中に歌が潜んでいるような挿絵のレイアウト、詠み手が月や柳といった自然界のものに語りかける形に書き換えた翻訳方法など、自然が人間と同じ生を生きていることを作品全体で強調しており、日本の自然観に憧れるジャポニズムの気運と呼応しながら、和歌における自然のテーマの重要性を一段と印象づけたと考えられる。

「欧米諸国における国生み神話の解釈の変遷と日本のイメージ形成」(〔雑誌論文〕 )

国生みとは日本神話の初めに出てくるイザナギとイザナミの二神による国土創造のことで、天武天皇による歴史書、『古事記』(712)と『日本書紀』(720)に記されている。両書の記述に差異はあるが、神世七代の最後に二神が現れて日本の島々を作ったとするエピソードは一致しており、日本の起源として語り継がれてきた。また、宣教師渡来の頃から日本の歴史や価値観、文化を知ろうとする多くの外国人の関心も引いてきた。欧米諸国における日本神話受容の研究はこれまでも多くあるが、本論文では国生みに特化し、この日本独自の創造神話がいかんして欧米諸国で知られ、どのような議論を呼び、さらにその解釈が日本のイメージ形成にいかんする影響を及ぼしたのかを、日欧交流黎明期からジャポニズムの時代を経て本格的な専門研究が始まる頃までを射程に入れて通史的に調査した。

宣教師たちは初め、唯一神が無から世界を作ったというキリスト教的世界観と日本神話との対立に直面したが、国生みが神話として知られるようになると、ケンペルが伝えた鶺鴒のエピソードや「アダムとイヴ」への例えが人々に強い印象を残した。そして、動物に性行為を教えられたというエロス、楽園のような島で生まれた二神の愛に関心が集まり、19世紀のジャポニズムの頃には国生み神話が愛と豊かな自然のイメージで脚色された。ジュディット・ゴーチエの小説『篡奪者』(1875)も、植物に覆われ動物が沢山棲みついた美しい島で二神が鳥から愛を教えられる場面を描き、そのイメージ形成に加担した。しかし、『古事記』『日本書紀』の翻訳や研究が行われる段階になって、二神が肉体交渉で島を生んだという赤裸々な描写が時に問題

視され、二神の神性を否定する見解も出てきた。だが同時に、二神の人間らしさや愛の存在に親近感を抱く見方もあり、人々にとって身近な神々の姿が描かれた。こうした経緯がラフカディオ・ハーンなどによる「神々の国・日本」というイメージの基盤の一つにあったと考えられる。

以上が本研究の主な成果である。

ジュディット・ゴーチエの文学作品に関する研究は未だ乏しく、とりわけ日本関連作品については日本人研究者の強みを生かして、その全体像や生成過程、意義を内外に明らかにする必要があった。個々の作品の詳細（より厳密な源泉資料の同定や、同時代の他の作家の作品との関連性など）については議論の余地が残されているが、本研究によって総合的に前進させられた。

今後の展望としては、「祭り」「和歌」「国生み」以外の日本文化が本作家の作品の中でどのように描かれているか、またそれが日欧文化交流史や欧米諸国における日本文化研究史にどのように位置づけられるかを調査することで、ジャポニズムの実態がより一層明らかになっていくと共に、異文化受容や自国文化に関する議論にも資する結果が得られるのではないかと考えている。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計4件)

吉川 順子、欧米諸国における国生み神話の解釈の変遷と日本のイメージ形成、『社藝堂』、査読有、第6号、2019、pp. 87-108.

吉川 順子、ジャポニズムを通して見る日本の伝統文化 和歌、『社藝堂』、査読有、第5号、2018、pp. 69-91

吉川 順子、ジャポニズムを通して見る日本の伝統文化 祭り、『社藝堂』、査読有、第4号、2017、pp. 51-72

Junko YOSHIKAWA, « La littérature comparée au Japon : de la réception de la littérature étrangère à la transmission de la littérature japonaise », *Revue de littérature comparée*, No 362, 2017, pp. 136-144  
査読有

### 〔学会発表〕(計2件)

吉川 順子、ジャポニズムを通して見る日本の伝統文化 国生み、日仏美術学会第143回例会、2017

吉川 順子、ジャポニズムを通して見る日本の伝統文化 祭、社会芸術学会2016年度総会、2016

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。